

Title	シュメール語の閉鎖音と摩擦音に就いて
Author(s)	福原, 信義
Citation	大阪外国語大学学報. 26 p.19-p.29
Issue Date	1972-01-25
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80423">https://hdl.handle.net/11094/80423</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# シュメール語の閉鎖音と摩擦音に就いて

福 原 信 義

## “On Sumerian explosives and sibilants”

In Sumerian loan-words which are attested to have passed to Akkadian in the third millennium, we may observe that Akkadian voiceless explosives and sibilants correspond to what is normally considered a voiced consonants in Sumerian. This fact seems to indicate that in the early period when the Akkadians introduced these Sumerian words, the so-called voiced consonants of Sumerian sounded voiceless to the Akkadians.

Thus the two series of phonemes of the Old Sumerian can be reconstructed. One series containing so-called voiced consonants expressed phonemes \*P, \*T, \*K, \*S which sounded voiceless to the Akkadians, and another series which is considered voiceless expressed aspirated consonants \*P', \*T', \*K', \*S'.

Owing to the *Akkadianization* of Sumerian in the Old Babylonian Period, these series were replaced by the voiced and voiceless consonants respectively.

Our result explains some problems consistently.

### I

シュメール語研究の傾向に就いて述べるなら、従来学者達の言語学的な関心を集めている研究事項は、主として文法問題に関連している。一方、音韻研究の分野に於いては、楔形文字に依る特異な書記法もあいまって、あまり活発でなく、シュメール語の音韻組織の基本的な性格にすら幾多の問題を残しているのが現状である。<sup>1)</sup>

ところで、系譜的帰属が不明で、しかも死滅した古代語であるシュメール語の攻究に於いて、欧米の言語学者達は、身近な既知の言語、特に印欧語、セム語の知識を、意識しないまでも無意識のうちに、基準として接近し、思わぬ誤解に陥っていることが往々にしてある。文法研究の中での、そのような偏見から起る誤謬に就いては、以前指摘されたことがあるが<sup>2)</sup>、同様なことが音韻の方面に於いても言い得るようである。筆者が気付いている一つに、閉鎖音と摩擦音の調音的特徴の問題がある。シュメール語には、一般に b, d, g, z と p, t, k, s で表記される閉鎖音と摩擦音から成る二組の子音系列が存在するが、これら二組の系列を峻別する調音上の示差的

特徴は、有声／無声の対立であるとする見解が、自明のこととして無批判に受入れられ、学者達の間で定説化されている傾きがある<sup>3)</sup>。これには、シュメール語の解読とその後の言語研究がアッカド語を通して、特にバビロニア人の作成した Syllabary に依拠してなされてきたと言う経緯があるものの、その発想の底には、やはり印欧語、セム語的な子音体系の構図が観取されるようである。後述するように、この見解に立って説明し尽せない問題に行当り、有声／無声の対立を、これら二系列の示差的特徴とするには疑問が残る。

前述したように、シュメール語の解読は、バビロニア人の残した Syllabary の分析に依拠して文字の音価が決定された。しかしながら、バビロニア人の言語記述は、今日のように科学的な方法でなされたものではなく、シュメール語の教授、修得という実用的な目的のために簡略化されたところがある。従って、これらの資料には、当然の限界があり、全面的に信頼を置くわけにはいかない。そこで、本稿では、在来 of 攻究とは視点を変えて、アッカド語がシュメール語から採用した借用語の中で、問題の閉鎖音、摩擦音が被る音声的適応に基づいて整理すると同時に、その整理に依って提示される音韻上の性格を明らかにしたい。<sup>4)</sup>それは、人為的に歪曲して記述されたところがあると推定される Syllabary よりも、借用語の内の方がシュメール語のそれらの音韻の特質が鮮明に反映しているのではないかと考えられるからである。以下本稿で使用するアッカド語とシュメール語の時代区分と略字は、次の通りとする。なお、アッカド語は、古期バビロニア時代以後、バビロニア方言とアッシリア方言の二大方言に分岐するが、借用語の音声的適応には差異は認められないので、資料の豊富なバビロニア方言を時代区分の基準とする。

アッカド語《Akk.》：古代アッカド語《OAkk.》(ca. 2500～2000 B. C.)、古期バビロニア方言《OB》(ca. 2000～1500 B. C.)、中期バビロニア方言《MB》(ca. 1500～1000 B. C.)、新期バビロニア方言《NB》(ca. 1000 B. C. 以後)。シュメール語《Sum.》：古期シュメール語《OS》(ca. 2600～2100 B. C.)、新期シュメール語《NS》(ca. 2100～2000 B. C.)、後期シュメール語《LS》(ca. 2000 B. C. 以後)。又、表記に於いては、シュメール語はブロック体、アッカド語はイタリック体と、古代オリエント学の習慣に従うことにする。

## II

アッカド語に入った借用語とシュメール語の語源間の音韻対応を、閉鎖音 b, p; d, t; g, k; 摩擦音 z, s の対応の順を追って述べて行きたいと思う。<sup>5)</sup>筆者が採集した借用語は、以下挙示する例の約五倍に昇るが、その内で、同時代に借用され、同じ語幹を含む借用語は一つに絞った。又 MB, NB 時代に借入した語は、音声的適応が一定しているから最少限の例を示すに留めた。

1) Sum. b—Akk. p, b

a) Sum. b : A kk. p 《OAkk.》ba-ba-za>pappāsu<sup>6)</sup> “麦粉のかゆ”, baḥar>paḥāru

- “陶工”, bala>palā'u/palū “治世”, bulug>pulukku “境界”, dub>tuppu “泥章”, abzu>apsū “深淵, 大洋, abyss”, ab-gal>apkallu “賢人”; 《OB》 babbar>papparu “光耀のある鉱石” の一種, bara(g)>parakku “聖所”, bar-uš>parušu “鋭利な棒”, ban-šur>paššūru “卓” ba-da-ra>patarru “棍棒”, ambar>appāru “葦原, 沼”, bur>pūru “石製容器”, bal>pilakku<sup>8)</sup> “紡錘”, ab>aptu<sup>9)</sup> “窓, 穴”, ub<sub>4</sub>>uppu “壁龕”, húb>huppu “神楽師”, šu-bal>šupēlu “交易する”, nu-bàn-da>laputtu “(軍隊の)上級指揮官”, ub>uppu “チンバル”, ba(p)pir>pappiru “麦芽”, uš-bar>i/ušparu “織師”.
- b) Sum. b : Akk. b 《OB》 ba-an-du<sub>8</sub>-du<sub>8</sub>>banduddū “大桶”, ba-si>basū “平方根”, at-bar>atbaru “玄武岩”, ab-sín>absinnu “溝”, i-bí-za>ibissú “(金銭上の)損失”, hubur>habburru “新芽”, ka-dib-bi-da>kadibbidū “啞”, kibir>kibirru “(松の)割木”, bur-zi-gal>burzigallu “大きな容器”; 《NB》 balag>balangu “琴”, bará-si-ga>barasiggū “祭壇”, bar-dù-a>bardū “留め具”, bar-gal>bargallu “羊” の一種, bur-sağ-gá>bursangu “供物”, arabu>arabū “水鳥” の一種, kab-íl>kabillu “車軸”.
- 2) Sum. p——Akk. p
- 《OB》 pa-kud>pakuttu “樹幹”, pi-lu<sub>5</sub>-da>pelludū “祭祀”, giš-pār>gišparru “畏”, apin>epinnu “播種用鋤”, bappir>bappiru “ビールパン”; 《MB》 gi<sub>6</sub>-pār>gipāru “野原, 牧地”; 《NB》 pa-pa-al>papallu “若芽”.
- 3) Sum. d——Akk. t, (t), d
- a) Sum. d : Akk. t, (t) 《OAKk.》 dub>tuppu “泥章”, dub-sar>tupšarru “書記”, gad>kitū “亜麻”; 《OB》 dal>tallu “容器”, dūg-gan>tukkānu “袋”, dur>turru “紐”, dim>timmu “綱”, dul>tillu “廢墟”, dub-gal>šupqallu “大型泥章”, udun>utūnu “炉”, lud>luṭṭ/ttu “飲料用容器”, kù-dím>kutimu “金銀細工師”, giš-dub>gištuppu “宝石” の一種, im-gíd-da>giṭṭu “一欄書きの泥章”, ba-da-ra>patarru “棍棒”.
- b) Sum. d : Akk. d 《OB》 ig-dib(-ba)>dippu “戸”, dirig>giri(g)gu “閏月”, gi-gur-da>gigurdū “籠”, é-duru<sub>5</sub>>adurū “村落, 分農地”, á-dù>adū “(日々の)課業”; 《MB》 a-da-gur<sub>5</sub>>adagu(r)ru/adakurru “(祭儀用)容器” の一種, é-da-di>edadū “麦粉の供物”; 《NB》 dingir-ug<sub>5</sub>-ga>dingiruggū “死滅した神々”, edin>edinu “草原”.
- 4) Sum. t——Akk. t
- 《OAKk.》 te-me-en>temennu “基礎”, šitim>itinnu “大工, 左官”; 《OB》 igi-te(-en)>igitēnu “端数”, má-tur>maturru “小舟”; 《MB》 namtar>namtaru “悪魔”, di-til-la>ditillū “(法的有効な)判決”, ba-tur>baturru “小鑿”; 《NB》 muš-taptin>muštaptinnu “陶製の盤”, é-gal-tur-ra>egalturrū “小宮殿”.
- 5) Sum. g——Akk. k, (q), g

- a) Sum. g : Akk. k, (q) 《OAkk.》 gu-za>kussi'u/kussú “椅子，玉座”， gad>kitú “亜麻”， gala>kalú “祭祀歌手”， é-gal>ekallu “神殿，宮殿”， gur>kurru “(容積の単位)ゲル”， gi-gù-na>kukunnú “社”， engar>ikkaru “農民”， éš-gàr>e/iškaru “課業”；《OB》 aš-gab>aškapu “皮鞣人”， gār>karu “柄頭”， gur<sub>7</sub>>q/karú “穀倉”， gir<sub>4</sub>>kīru “炉”， gúg>kukku “菓子”の一種， gú-tál>kutallu “後頭部”， nig-gul>akkullu “つるはし”， nig-gig>ikkību<sup>10</sup> “タブー”， bur-gul>parkullu “印章工”。
- b) Sum. g : Akk. g 《OB》 gaba-gál>gabagallu “戦車の防護板”， gá-gi<sub>4</sub>>gagú “尼僧院”， gal<sub>3</sub>-lá>gallu “悪魔”， ga-na>gana “やあ，おい（感嘆詞）”， giš-gal>gišgallu “玉座，台座”， ga-raš-sağ>geršānu “ネキ”の一種， ħé-gál>ħe(n)gallu “豊富，過多”， a-garin>agarinnu “ビールの醸造水”， aga>agú “王冠”， agi<sub>6</sub>-a>agú “水流，波”， inim-gar>egerrú “開陳”， é-gar<sub>8</sub>>igāru “壁”， igi>igú “眼；逆数”；《MB》 gaba-ri(-a)>gab(a)rú “複写”， gi-na>giná “絶えず”， im-gur>imgurru “粘土の覆，泥章の封簡”， kur-gar-ra>kurgarrú “祭司”；《NB》 gu<sub>4</sub>-gal>gugallu “大牛”， aga-sisa>agasisú “額帶”， a-gúb-ba>agubbú “聖水用容器”， éš-gal>ešgallu “大神殿”， igi-gub>igigubbu “係数”。
- 6) Sum. k—Akk. k 《OAkk.》 kan>kannu “卓，大型の容器”， kar>kāru “埠頭”， kiri<sub>6</sub>>kirú “果樹園”；《OB》 ka-mar>kamāru “魚”の一種， kām>kammu “皿”， ki-lá>kilakku “穀倉”， kurūn>kur(u)nu “(上質の)ビール”， á-ku<sub>5</sub>>akú “不具者”， akkil>ikkillu “悲嘆”， ka-giš-ka-kara<sub>4</sub>>kagiškarakku “卓”， karaš>karāšu “野営”；《MB》 é-kur>ekurru “神殿”；《NB》 kab-il-gigir>kabbillu “車軸”， kissa>kisú “泥造りの壁”。
- 7) Sum. z—Akk. s, (š), z
- a) Sum. z : Akk. s, (š) 《OAkk.》 abzu>apsú “深淵”， an-za-am>as/nsammu “壺”の一種， zabar>sipparu “銅，青銅”， a-zu>asú “医師師”， gú-za>kussú “椅子，玉座”， zambir>sippar “(地名)”， ba-ba-za>pappāsu “麦粉のかゆ”；《OB》 zì-kum>isqūqu “麦粉”， zulum(b)>suluppu “なつめ椰子”， zi-gan>sikkānu “舵”， zi-muru<sub>4</sub>>simmāru “麦芽，麦粉の分配”， zur<sub>4</sub>>surrú “神宮”， uz>u(s)sú “雁”， ú-zú>usukku “不浄な者”， az>asu “熊”， izkin>iskimmu “前兆”， azag>assaku “タブー”， áb-za-za>apsasú “下半身が牛の怪物”， gu-zi>kāsu “杯”， mez>mésu “エノキ”， u-zug>usukku “遊女”， bur-zi>pursitu “鍋”。
- b) Sum. z : Akk. z 《OB》 zalag>s/zalak “光耀のある”， za-ħa-da>zaħaṭu “戦闘用斧”， za-ra>zarú “車の一部”， a-zu-gal>azugallu “医師長”， gu-za-lá>guzalú “官職名”；《NB》 a-zal-lá>azallú “菓草”， izi-šub-ba>izišubbú “落雷”， gi-izi-la>gizillú “祭儀用松明”， gú-zal>guzallu “無頼漢”。

8) Sum. s—Akk. š, s, (š)

- a) Sum. s : Akk. š 《OAkk.》 ensi>išši'akku/iššakku “領主”, e-si>eši'u “閃緑岩”, ulusin-maḥ>ulušinmaḥḥu “ヒール”の一種, ḥur-saḡ>ḥuršanu “山脈, 山岳地域”; 《OB》 ur-saḡ>uršānu “山鳩”, gi-sal>gišallu “榧”, esi>e/ušu “楓”, á-sukú>aškuttu “大門”, saḡ>šaḡú “頭; 首領”, saḥur>šuharratu “容器”の一種.
- b) Sum. s : Akk. š/s 《OAkk, OB》 dub-sar>tupš/sarru “書記”, bar-si(g)>parš/sigu “頭巾”, nisag>niš/sakku “祭司”, sanga-maḥ>š/sangu-maḥḥu “大祭司”, ab-sín>abšinnu/absinnu “乙女座”, pisan>piš/sannu “容器”の一種, sila>š/sulú “道路”.
- c) Sum. s : Akk. s 《OB》 á-sig>asakku “病魔”, ensi>ensú “夢占い師”, igi-sá>igisú “年貢”, ki-sur-ra>kisurú “境界; 領地”; 《NB》 a-sù-ra>asurraḥku “地下水”, ber-si-sá>bersisú “ミルク用容器”, eme-sal>emesallu “女性語, エメサル”, dub-ús-sa>duppusú “弟”.

III

上掲の諸例に依り容易に察知される如く, シュメール語からアッカド語へ借用語が導入される  
とき受ける音声的適応では, シュメール語の三閉鎖音 p, t, k が安定した姿を見せる一方, 閉  
鎖音 b, d, g と摩擦音 s, z の対応には著しい浮動が認められる。まず, t, k が強勢音 t̪, q へ  
と, 恐らくは偶発的な移行をする外は, 系列 p, t, k は, 全て規則的に無声閉鎖音 p, t, k で  
音声的代用を受け, この「一対一」の対応関係は絶対的で決して崩れることはない。周知のよう  
に, アッカド語の強勢音 t̪, š, q が無声音であることは, 他のセム諸言語との比較で証明されて  
いる事実であるから, 結局, 系列 p, t, k は無声音として音声的適応をしていることになる。有  
声音の系列とされる b, d, g は, 借用語の中で無声音 p, t/(t̪), k, (q) と有声音 b, d, g の  
二系列で対応する。更に, 摩擦音 z, s に於いても, 二通りの対応関係が成立つ。即ち, z は s,  
(š)/z, s は š/s と浮動的で, 複雑な音韻対応を顕わしている。閉鎖音 p, t, k を除いた他の音  
韻が呈する浮動的な対応関係が, 音環境の条件に左右されていないことは, 同一条件下で, 同一  
語幹を含む借用語が別々の音声代用を被っている例からも察しが付く (gu-za>kussú : gu-za-lal  
>guzalú, ba-an-du₈>attú : ba-an-du₈-du₈>bandudú, a-zu>asú : a-zu-gal>azugallu,  
pisan>piš/sannu, etc.)。以上の考察から導き出される借用語の音韻対応を図示すると次のよう  
になる。

	《Sum.》	《Akk.》
閉鎖音 {	b, d, g {	b, d, g
	p, t, k {	p, t, k
摩擦音 {	z {	z
	s {	s
	š {	š

更にシュメール語からアッカド語に入った借用語は、chronology の視点から、少なくとも二種類の語群に類別することが出来る。その一つは、古期バビロニア時代を境として、それ以前の三千年代、つまり古代アッカド語の段階で借用されたことが確認出来るグループである。他の一つは、二千年代に入って借用された語群で、後期シュメール語から入ったものである。この借用語の年代的類別を音韻対応の考察に加えて検討するなら、一見不規則な様相を呈していた対応関係に規則を発見出来る。つまり、p, t, kは、全時代を通じてそれぞれ無声閉鎖音 p, t/(t), k/(q) に置き換えられる。一方、有声閉鎖音と看做されている系列 b, d, g は、三千年代に借用された語群内では、無声閉鎖音 p, t/(t), k/(q) で、二千年代に於いては有声閉鎖音 b, d, g で音声的適応を受けている。摩擦音に於いても同様の対応関係が時代別に指摘される。古代アッカド語が採用した借用語の中では、z には s が、s には š が対応し、その後は、それぞれ z, s へ移行する。前節に於いていささか繁雑を予想しながらも対応例を時代区分して列挙したのは、借用に於ける音声適応の時代的分布を調べるためであった。このように chronology の視点からの考察を加えることによって時代区分するなら、全ての系列が「一対一」の対応関係をなしており、先に掲げた音韻対応の図式は次のように修正されねばならない。

	《Sum.》	《OAkk.》	《OB》	《MB, NB》
閉鎖音	$\left\{ \begin{array}{l} p, t, k \cdots \cdots p, t, k \\ b, d, g \cdots \cdots p, t, k \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} p, t, k \cdots \cdots p, t, k \\ p/b, t/d, k/g \cdots \cdots b, d, g \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} p, t, k \cdots \cdots p, t, k \\ p/b, t/d, k/g \cdots \cdots b, d, g \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} p, t, k \cdots \cdots p, t, k \\ p/b, t/d, k/g \cdots \cdots b, d, g \end{array} \right.$
摩擦音				
	$\left\{ \begin{array}{l} s \cdots \cdots š \\ z \cdots \cdots s \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} s \cdots \cdots š/s \\ s \cdots \cdots s/z \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} s \cdots \cdots š/s \\ s \cdots \cdots s/z \end{array} \right.$	$\left\{ \begin{array}{l} s \cdots \cdots š/s \\ s \cdots \cdots s/z \end{array} \right.$

借用語の中に見られる音韻対応の、このような時代的相違は、どのように解釈されるべきであろうか。従来借用に於けるシュメール語の有声音の無声化現象は、単に「アッカド語化」として説明されて来たが<sup>11)</sup>、この見解では、古期バビロニア以後に採用された借用語の中で、規則的に有声音で現われる現象を説明出来ない。又、アッカド語は、セム系諸言語の中で、特に守旧的な言語ではないが、これらの閉鎖音と摩擦音に関しては、古代アッカド語以来音韻推移は認められないから、音韻対応に於ける時代差の原因は、当然シュメール語内部に求められねばならないと考えられる。

一般に他言語から借用語を採用するような場合、特にそれが耳から入ってくる場合には、音声的適応は聴覚的に一番近似する自国語の音韻を持ってなされるのが普通である。もし、系列 b, d, g, z が、従来主張されて来たように有声で特徴付けられる音群であったならば、借用に際してアッカド語の有声閉鎖音が使用されたはずである。ところが三千年代、即ち古代アッカド語に入った借用語では、有声音とされる b, d, g, z は、規則的に無声子音 p, t/(t), k/(q), s/(š) と対応するのである。この対応関係の事実は、三千年代のシュメール語に於いて、b, d, g, z は無声子音であったか、或いは、アッカド人に聴覚的に無声子音として響く音であったのではあ

るまいかと推察される。もし音声記号で表わすなら、それぞれ [b̥], [d̥], [g̥], [z̥] に恐らく近似する調音をしたのではないだろうか。そこで、この系列に対して \*P, \*T, \*K, \*S を、又、もう一つの系列 p, t, k, s に対して \*P', \*T', \*K', \*S' を指定することにする。この再構形に従えば、三千年代にアッカド語が採用した借用語の中で起った、有声とされる音韻が無声音で代用される現象は説明され得る。つまり、二組の系列内の子音群 \*P, \*T, \*K, \*S / \*P', \*T', \*K', \*S' は、アッカド人には、どちらも無声音として聴覚的に響いたから、古代アッカド語では、両系列の音韻を全て無声音で音声的適応をさせたのである。

それでは、両系列を峻別する調音上の特徴は、何であつたろうか。これについては音韻対応関係や楔形文字は、も早なにも語ってくれない。ただ摩擦音 \*S' (=s) が、無声音とされる系列の中では一つだけ二種類の対応 s/s をすることから、この音韻が s で代用された時期には、恐らくは帯気音であつたろうと推定される。音韻推移に於いて同じ系列、又二つ以上の系列から成立つ相関束内の音韻は、全て同様の变化をするのが普通である。<sup>12)</sup> 摩擦音 \*S (=z) も \*S' (=s) も閉鎖音と並行した借用の音韻対応を示すから、それらと同一の相関束に属していると考えられる。以上の推定から、\*S' と同じ系列の \*P', \*T', \*K' は帯気音群で、\*P, \*T, \*K, \*S とは帯気/無気に依る調音上の対立であつたと言う結果が導き出される。

古期バビロニア時代に入ると、前節で例証されている様に音韻対応が激しく浮動するのは、この時代に音韻推移が起ったことを顕わしている。この時期に系列 \*P, \*T, \*K, \*S は有声音 b, d, g, z へ、\*P', \*T', \*K', \*S' は無声音 p, t, k, s へと移行したのである。だから中期バビロニア時代以後の借用語では、シュメール語の音韻 b, d, g, z / p, t, k, s は、それぞれの音に近似するアッカド語の有声音/無声音で「一対一」の対応するようになる。シュメール語の音韻推移を図示すれば次のようになる。

《OS, NS》	《Oakk.》	《OB》	《LS》	《OB, MB, NB》
*P, *T, *K, *S	.....	p, t, k, s	{ (音韻推移)	b, d, g, z
*P', *T', *K', *S'	.....	p, t, k, s		p, t, k, s

#### IV

シュメール語と借用語との間に成立つ音韻対応から導き出された結果と、それに基づいて再構成したシュメール語の閉鎖音と摩擦音は、問題とされて来た幾つかの事項を合理的に説明する。このことは、取りも直さずそれらの音韻を再構成した推論の正当性を証明していることにもなる。

1) 三千年代にアッカド語からシュメール語に入った借用語がある。アッカド語が採用した借用語に比べると、遙かに少ないが、音韻対応の規則を導き出すことは可能である。アッカド語の閉鎖音、摩擦音は、次のような対応関係を見出す。



- 1) Akk. *b*—Sum. *b* : *rākibu* > *rág-aba* “騎手”.
- 2) Akk. *p*—Sum. *b* : *gaṣarru* > *ga-ba-ra* “牧童”, *šapiru* > *šabra* “行政官”.
- 3) Akk. *d*—Sum. *d* : *wardu* > *urda* “奴隸”, *naqidu* > *na-gada* “牧人”, *adamatu* > *adama* “黒い血”.
- 4) Akk. *t*—Sum. *d* : *mātu* > *ma-da* “国土”, *tamḥaru* > *dam-ḥa-ra* “戦闘”, *tankaru* > *dam-gàra* “商人”.
- 5) Akk. *g*—Sum. *g*?
- 6) Akk. *k*, (*q*)—Sum. *g* : *maškānu* > *maš-gána* “使者”, *naqidu* > *na-gada* “牧人”, *karmu* > *ga-ra-an* “ブドウの木”, *šaknu* > *šagina* “代官”.
- 7) Akk. *z*—Sum. *z* : *ziriqu* > *zi-ré-gum* “灌漑用装置”.
- 8) Akk. *s*—Sum. *z* : *\*wsm* > *ezem* “祭”.
- 9) Akk. *š*—Sum. *š/s* : *šadu* > *sa-tu* “山”, *šūmu* > *sum* “ニンニク”, *maškānu* > *maš-gána* “使者”.

音韻対応を簡略にするため、図式化すると次のようになる。

	《OAkk.》	《OS, NS》
閉鎖音	$\left\{ \begin{array}{l} b, d, g \dots\dots\dots \\ p, t, k \dots\dots\dots \end{array} \right\}$	$b, d, g$
摩擦音	$\left\{ \begin{array}{l} z \dots\dots\dots \\ s \dots\dots\dots \\ š \dots\dots\dots \end{array} \right\}$	$z$ $s/š$

この対応関係は、古代アッカド語がシュメール語からの借用の際に行なった音声的適応の、ちょうど逆の適応であることが認められる。偶然にこのような全く逆の音声的適応が起ったと看做すことは出来ない。しかし、前節で得られた結果をもって、次のように推察出来よう。無声音である見做とされていた *p, t, k, s* は、実は帯気音 *\*P', \*T', \*K', \*S'* であったため、アッカド語の無声無気音 *p, t, k, s* と置き代えるには、あまりに掛離れた響きがあり、有声閉鎖音 *b, d, g, z* と同様、*b, d, g, z*、即ち *\*P, \*T, \*K, \*S* の系列の音韻を含む文字で写したのである。更に *s* が *s* で置き代えられる例があるが、これも三千年代のシュメール語では、*s* が *š* に近い特徴を持つ音、恐らく帯気音 *\*S'* であったためと推定される。

2) 文字の使い分けに依って有声／無声を区別する書記法が確立して行く過程が初めて認められるのは、古期バビロニア時代に入ってからである。それ以前の古代アッカド語では、セム諸言語との比較から明らかに無声子音である語根が、有声子音を含む文字をもって記録されていることがある。

$\sqrt{pt}$  “開く” : *ba-ti-tum*,  $\sqrt{škn}$  “置く” : *a-sa-ga-nu*, *iš-ku-nu*,  $\sqrt{šlm}$  “良好である” : *sál-ma-at*, *u-sa-lim*,  $\sqrt{tkl}$  “信頼する” : *A-da-gal*, *-da-gal*, *-ta-gal*,  $\sqrt{rks}$  “結ぶ” : *ir-ku-zu*, *ir-ku-us*,  $\sqrt{s'h}$  “笑う” : *a-zé-ḥa-me*, etc.<sup>13)</sup>

古代アッカド語は、シュメール人の使用する楔形文字の書記法、即ちシュメール語の音価に従って記録されたのであるから p, t, k, s, つまり帯気音である \*P', \*T', \*K', \*S' を含む文字でアッカド語の無声子音を書き写すより、むしろ b, d, g, z, つまり無気音の \*P, \*T, \*K, \*S を持つ文字を使用した方が適当であったからであると推察される。アッカド語の書記法に於いて、有声／無声の文字の使い分けが三千年代に確立せず、無差別に使用された原因も、シュメール語の二系列の対立が有声／無声でなかったことに存在すると思われる。だから、古期バビロニア時代に、シュメール語の内部で音韻推移が起り、これら二系列の対立が有声／無声となる時と、文字の使い分けによる書記法が確立する時期が一致するのである。又、摩擦音 *s* が *s* を含む文字で書き写されている事実は、シュメール語の *s* が三千年代に保持していた特質は従来看做されて来たような無声摩擦音 *s* ではなく帯気音 \*S' であったことを示唆している。それ故 \*S' (=s) は、アッカド語の *s* に聴覚的に類似しており、それを書き写すのに \*S' を含む文字が使用されたと推定される。

3) Syllabary の中で、従来有声とされる閉鎖音を含む文字の音価が無声音として示されている例を幾つか拾い挙げる事が出来る。

MSL. III, Sa p. 15~<sup>14)</sup>

- 15) 1 ta-al | DAL | *da-al-lu*  
 99) 1 pi-i | BÍ | " (=i-zu-u)  
 100) 1 pi-il | BÍ | " (= " )  
 133) 1 pa-ar | BAR<sub>11</sub> | " (=ut-tu-ú)

MSL. II, Zweispalt. p. 71

- 498) ku-ub | GUB |

上掲の例は、従来 b>p, d>t, g>k の音韻推移がシュメール語内部で起ったかの如く説明されたり、或いは、単に有声子音を無声化する「アッカド語化」現象と看做されて来た。しかし、シュメール語の中で有声子音が無声子音へと推移した跡は認められない。実は、これはシュメール語の古形 \*P, \*T, \*K が名残を留めていると解釈するのが適当と考えられる。事実 Syllabary には、音韻、形態の両方面に於いて、このような古形の残存が随所に認められるのである。<sup>15)</sup>

## V

これまで、古期シュメール語の二組の音韻系列 \*P, \*T, \*K, \*S / \*P', \*T', \*K', \*S' が新时期シュメール語を経て、古期バビロニア時代に b, d, g, z / p, t, k, s へと音韻「推移」したと述べて来た。しかし、ここで「推移」に就いて検討してみる必要がある。

音韻推移が起った古期バビロニア時代は、言語の上から次のような特質を持った時期であった。まず、アッカド語を採用した西セム系のアムル人が各地に小王国を建て、やがてハムラビが

バビロニアを統一するに及んで、バビロニアは全くセム化してしまった。以後シュメール人はセム人に同化され、殆んど歴史の舞台から姿を消し、彼らと共にシュメール語も死滅の運命を辿ったのである。シュメール語に代ってアッカド語が普及するのであるが、この時代以後もシュメール語は宗教や文学などの用語として利用され、セム人の中で命をながらえるのである。このような時期と音韻推移の起った時期が一致しているのは、アッカド語の影響の下で living tongue としてのシュメール語内部で音韻変化があったと考えるよりは、死滅したシュメール語が宗教や学術用語として保存される必要上アッカド語化された際に起った現象と推定する方が妥当である。つまり、シュメール語の教授、修得に際してアッカド語の子音体系には存在しない二組の子音系列 \*P, \*T, \*K, \*S / \*P', \*T', \*K', \*S' をアッカド語の有声閉鎖音／無声閉鎖音の二系列で置き換え、シュメール語の教授及び使用の単純・簡略化を計ったために起った音韻推移であろう。古期バビロニア以後にシュメール語から借入された語群は、このように意識的にアッカド語化されたシュメール語の訓読から入ったのであり、それ故音韻対応に於いても b, d, g, z / p, t, k, s が b, d, g, z / p, t, k, s に「一対一」の規則的対応関係を示すのだと推察出来る。

シュメール語の閉鎖音と摩擦音から成る系列内での音韻推移は、living tongue としてのシュメール語内部で起ったものではなくて、バビロニア人によってアッカド語化される過程での音韻系列の「置き換え」に由来しているのである。この「アッカド語化」を無視したところに、古代シュメール語から新期シュメール語への段階でこれら二組の音韻系列の示差的特徴を、従来有声／無声と誤解した原因がある。<sup>10)</sup>

#### 《註》

- 1) 例えば、母音調和と tone アクセント、母音の長短が存在したと主張されながらも、それらの性格は簡明されていない。更に、文字の使い分けから第二の l, Eme-sal との比較研究から g と第二の g が音韻として推定出来るかの問題等。
- 2) 吉川守「シュメール語の動詞に於ける数について」広大言語第6号(1966), p. 39.
- 3) A. Deimel “Šumerische Grammatik” (1939), p. 15; R. Jestin “Abrégé de grammaire sumérienne” (1951), p. 36; A. Falkenstein “Grammatik der Sprache Gudeas von Lagaš” (1949), p. 36~, “Das Sumerische” (1959), p. 24.; R. Labat “Manuel d'épigraphie accadienne” (1963), p. 15 など。
- 4) シュメールとアッカドとの相互関係については、E. Sollberger 編集 “Aspects du contact suméro-akkadien”, GENAVA, NS Tome VII (1960) 参照。
- 5) 借用語を採集した資料: “The Assyrian Dictionary of the University of Chicago” (1956~); W. von Soden “Akkadisches Handwörterbuch” (1958~); F. Delitzsch, “Akkadisches Handwörterbuch” (1896); A. Deimel “Sumerisches Lexikon” (1925); R. Labat “Manuel d'épigraphie

accadienne” (1963). 最初に掲げた二冊は、約半分程しか完成しておらず、又他の辞典は、借用語が在証される時代が記載されていない。

- 6) アッカド語に限らず、セム諸言語は、借用した外来語を paradigm に型嵌めしなければ機能さすことは出来ない。従って、この場合の子音の gemination や母音の長音化は、このために起ったものである。語末の母音 *-u, -ū* は単数主格を、*-ū* は複数を表わす。
- 7) アッカド語とカナン系セム語では、*n* が後に続く子音に progressive assimilation する傾向があるから、*-ns- > -ss-* の同化は、借用に依る音声上の適応ではなく、アッカド語内部での変化である。
- 8) 語末の *-kk-* は、語幹に三つの子音を揃えるために、シュメール語の属格を表わす接尾辞 *-a(g)* を、他の借用語からの類推で付加したものと推定される。
- 9) *-tu* は女性名詞を表わすアッカド語の接尾辞で、シュメール語の語幹が短いのを補うために加えられたもの。
- 10) *ikkibu* は恐らく Eme-sal からの借用と考えられる。Eme-KU と Eme-sal の音韻対応に於いて、Eme-KU の語頭の *n* は多様の対応形を持ち、語末の *g* は *g/b* に対応するからである。吉川守「エメサルの研究」西南アジア研究 No. 10 (1963) 参照。
- 11) 吉川 守「シュメールに於けるアッカド語の借用語について」広大言語第 6 号 (1966)。
- 12) A. Martinet “Function, structure, and sound change”, Word 8 (1952), p. 15.
- 13) I. J. Gelb “Old Akkadian writing and grammar” (1961), p. 175~180. から採録。
- 14) B. Landsberger u. a. “Materialien zum sumerischen Lexikon” (1937).
- 15) 例えば, A. Poebel “The root *si(m)* and *su<sub>11</sub>(m)*, “to give” in Sumerian”, JAOS, vol 57. (1937), p. 35~72.
- 16) 一つ疑問として残るのは、シュメール語の *š* の音韻の性格である。しかし、本稿で得られた結果をもとに、楔形文字に依る書記法を詳細に攻究するなら解明出来る問題だと考えている。筆者は、この *š* は破擦音ではなかったかと推定している。